

昭和のベストセラー

昭和のベストセラー

今回は、昭和 63 年（1988）から昭和 39 年（1964）の四半世紀にわたるベストセラーをご紹介します。

1980 年代の出版業界は量産志向・利益志向が顕著になり、出版社は年々利益を出す出版物を持たないと経営維持が難しくなりました。1970 年代は昭和 46 年（1971）のドル・ショック、同 48 年（1973）のオイル・ショックで紙が暴騰し新刊書籍の発行も滞りました。また、廉価な文庫本の出版が相次ぎました。昭和 51 年（1976）には戦後生まれが人口の半分を超え、6000 万人近くが 31 歳以下の人口構成になりました。そのため出版界も様変わりし、教養型の出版物は追いやられ、効率よく大量に捌けるベストセラーが求められました。昭和 39 年（1964）から同 45 年（1970）は、昭和元禄といわれた好景気に沸きました。出版業界は全集ブームが起こり、この頃日本の全家庭に行き渡ったテレビの影響で、大河ドラマの原作がベストセラーになり、「テレセラー」という造語が生まれました。また、新しい新書であるカッパ・ブックスを創刊した神吉晴夫は、1960 年代には『頭の体操』や『冠婚葬祭入門』などのベストセラーを連発しました。

[資料リスト](#)

ベスト 1（～3）の紹介

昭和 63 年（1983）『ノルウェイの森』 上・下、村上春樹著。セックスで肉体的に交わることが出来ても、精神の次元ではコミュニケーションができないため、孤独の中で精神を病んでいる人物をえがいています。

昭和 62 年（1982）『サラダ記念日』、俵万智著。出版社の編集者は「一首読むと、次の歌が待ち遠しい。俗に寝食を忘れて没頭するといいますが、私は時間の経過も忘れて、一晩で全部まとめて読みました」といっています。

昭和 61 年（1981）『化身』 上・下、渡辺淳一著。中年の文芸評論家秋葉には史子という愛人がいました。しかし、秋葉は若い銀座のホステス霧子を手に入れ、理想の女性に仕立てていきます。

昭和 60 年（1980）『女の器量はことばしだい』 広瀬久美子著。あなたが持っていることばの宝石箱を、もっともっと磨いてみませんか。言葉は「生き物」。生かすも殺すもあなたしだい。自分の本音を、照れず、隠さず、素直に言葉に変えて、素敵な人生を送りましょう。

昭和 59 年（1984）『愛のごとく』 上・下、渡辺淳一著。42 歳で 2 人の娘のいるフリーライターとその妻、28 歳の OL の 5 年越しの三角関係を描いた作品です。著者が男女のドロドロした関係をえがくのは、そこに小説の永遠のテーマがあると信じているからといえます。

昭和 58 年（1983）『気くばりのすすめ』、鈴木健二著。本書に「結論からいえば、人間関係とは、その人の「全人格の他人への反映」なのである。人間関係とは、いわばその人自身を写した鏡であるといつてよい。」「自分の長所、短所を見きわめ、無理のない自然な振舞いの中から人間関係をつくっていくということである。」とあります。

第2位の『積木くずし』は、非行に走った娘をなんとか立ち直らせようと、夫婦して死にもの狂いで悪戦苦闘する様子をえがいています。

昭和57年(1982)『悪魔の飽食』、森村誠一著。日中戦争中に中国で旧日本軍の731部隊が行ったとされる人体実験を告発したものです。第2位の『プロ野球を10倍楽しく見る方法』は元阪神タイガースの江本孟紀投手の本で、「ベンチがアホやから野球がでけへん」のセリフを残して球界を去った選手です。

昭和56年(1981)『窓ぎわのトットちゃん』、黒柳徹子著。トットちゃんは黒柳徹子の幼少期の愛称で、この本はトットちゃんの自伝的な物語です。また、本書は昭和天皇が関心を持たれ、昭和57年の園遊会で「…よく売れたそうで…」とお問いかけがありました。

昭和55年(1980)『シルクロード 糸綯之道』1～4、日本放送出版協会。中国と地中海世界を結ぶ歴史的な交易路をシルクロード(絹の道)といいます。絹が中国では最も重要な交易品であったためこの名が付けました。

昭和54年(1979)第1位『算命占星学入門』、第2位『天中殺入門』ともに和泉宗章著。70年代後半は構造的といわれる不況ムードにあり、こうした社会情勢の下で両書がベストセラーになりました。人には誰にも「天中殺」の時期があり、その時にことを起こすと必ず破滅するという「凶」を予告し話題をさらいました。

昭和53年(1978)『和宮様御留』、有吉佐和子著。幕末に公明天皇の妹である和宮が、14代将軍家茂に降嫁しました。この作品では和宮が替え玉であったという衝撃的な内容の歴史小説です。第2位の『不確実性の時代』ジョン・K. ガルブレイス著は、長期不況の中、過去200年にわたる経済思想史を、それぞれの時代に関連づけながら一つの長期的な見通しを打ち出した経済学書です。

昭和52年(1977)第2位『ルーツ』、アレックス・ヘイリー著。アメリカ黒人は「どんなアメリカ黒人の祖先も、たどれば一枚の売札にいきつき、それ以上はさかのぼれない。多くの場合、それさえ不可能である」(ジュリアス・レスター)といわれますが、この作品は不可能とされた祖先探しを7代200年前に遡った大河小説です。

昭和51年(1976)『翔ぶが如く』1～7、司馬遼太郎著。征韓論から土族反乱、明治10年(1877)の西南戦争にわたる時代を舞台に、西郷隆盛と大久保利通の2人を主人公に、友情と対立をえがいています。第2位は『限りなく透明に近いブルー』村上龍著。麻薬とセックスに明け暮れる、米軍基地の町福生の若者たちのスキャンダラスな青春を、みずみずしい感性でえがいています。

昭和50年(1975)『播磨灘物語』上・中・下、司馬遼太郎著。豊臣秀吉の軍師として有名な黒田官兵衛(如水)の生涯を描いた歴史小説です。第2位の『複合汚染』有吉佐和子著。本書は著者が「今日の工業生産中心の科学技術が、自然を、農業を、生活を、健康を、精神を、そして人間を手ひどく汚染し破壊し滅亡の淵まで追いやっている現実に、文学者として人間として黙って見過してられない危機を感じ、心の底から憂いかつ怒り」執筆しました。

昭和49年(1974)『かもめのジョナサン』、リチャード・バック著。ベトナム戦争敗北後のアメリカで読まれ、日本でも若者の心をとらえた本です。カモメのジョナサンが飛ぶことに生きる喜びと意味を求めて、スピードの限界に挑むといった寓話です。

昭和48年(1973)『日本沈没』上・下、小松左京著。この年は2月に浅間山大爆発、5月に首都圏真下に大断層発見と小笠原沖海底噴火、6月に桜島大爆発が起こり、出版社の宣伝はあたかも日本沈没が迫っているようなムードをかきたてました。

昭和 47 年 (1972) 『恍惚の人』 有吉佐和子著。著者は「現代にあつて老いて生きるのは自殺するより遥かに痛苦のことであると悟った。科学の進歩は人間の寿命を延ばしたが、それによって派生した事態は深刻である」と述べています。

昭和 46 年 (1971) 『日本人とユダヤ人』、イザヤ・ベンダサン著。両民族の自然環境、歴史、社会的環境の違いからくる、ものの考え方、見方、生き方の差の論証の見事さに、著者は誰かが話題の的になりました。

昭和 45 年 (1970) 『冠婚葬祭入門』、塩月弥栄子著。本書は「日本人として当然知っておかねばならない社会生活の慣習を、わかりやすく解説した本」です。

昭和 44 年 (1969) 『天と地と』上・中・下、海音寺潮五郎著。越後の上杉謙信を主役に、川中島で5回にわたって戦った甲斐の武田信玄との争いを描いた小説です。NHKの大河ドラマで本作が放送されて大ベストセラーになりました。しかし、海音寺は「文学がテレビの力を借りないと読まれないのは嘆かわしいことだ」と、作家引退を表明しています。

昭和 43 年 (1968) 『どくとるマンボウ青春記』、北杜夫著。中央公論社で北を担当した編集者は、「北さんの文学的出発の原風景、土壌が書かれていて、青春期の苦しみ、悩みを客観視して、サラリと書いています。」と述べています。

昭和 42 年 (1967) 第1位『頭の体操』第1集、第3位『同』第2集、多湖輝著。著者は「パズルを道具として、頭の柔軟性、創造性の開発を志しました。読んでいるうちに、どんどんあたまがほぐれて、新しい考え方がでてくるのが、実感としてわかっていただけだ」といっています。

昭和 41 年 (1966) 『氷点』三浦綾子著。朝日新聞の1000万円懸賞小説の入選作品です。「人間の原罪をテーマにした家庭小説で、主婦のよろめきを導入部に、ママ子いじめを主調音とし、暗い宿命に哭くヒロインと見せかけて、最後はハッピーエンドでしめくくる」作品です。

昭和 40 年 (1965) 『日本の歴史』1～10、中央公論社。昭和40年～42年にかけて中央公論社から刊行された本書は、刊行と同時に高い評価を各方面から受け、今日においても最良の日本通史として読まれています。

昭和 39 年 (1964) 『愛と死をみつめて』、河野実著。軟骨肉腫瘍という奇病に罹り、顔の半分を切除した女子大生大島みち子と、その恋人河野実との間に交わされた書簡集です。5年間に交わされた400通のうち、約半分を掲載しています。

* 文中敬称を略させていただきました。

【参考文献】

『昭和ベストセラー世相史』 塩澤実信著 第三文明社 昭和63年

『本は世につれ』 植田康夫著 水曜社 平成21年

「TRC・MARK」他

